

第四期「板橋区子ども読書活動推進計画」検討委員会 要点記録

会 議 名	令和6年度 第2回 第四期板橋区子ども読書活動推進計画検討委員会
開 催 日 時	令和7年1月9日（木） 14時00分から16時00分まで
開 催 場 所	板橋区役所南館2階 人材育成センター
出 席 者	<p>24人 〔委員〕山口委員長、鈴木副委員長、東委員、松本委員、井上委員、坂田英子委員、坂田敦子委員、水野委員、藤井委員、児玉委員、田倉委員、雨谷委員</p> <p>〔識見者〕三辺氏</p> <p>〔事務局〕</p> <p>〔区〕ブランド戦略担当課長、保育運営課保育運営・給食係長（※保育運営課長代理）、子育て支援課長、学務課長、指導室統括指導主事（※指導室長代理）、生涯学習課文化財係長（※生涯学習課長代理）、地域教育力推進課長、中央図書館長</p> <p>〔地域図書館代表〕清水図書館長、高島平図書館副館長、東板橋図書館長</p>
	公開（傍聴できる） 部分公開（部分傍聴できる） 非公開（傍聴できない）
傍 聴 者 数	1人
議 題	<p>1 開会</p> <p>2 議事</p> <p>（1）前回会議の振り返り</p> <p>（2）現状までの意見まとめ</p> <p>（3）各基本方針に関する施策の検討</p> <p>①子どもと本の出会い・自主性の育成をサポートする手法と人材活用</p> <p>②ティーンズ世代に有効な取組</p> <p>③読書バリアフリー法を踏まえた利用しやすい図書館環境／新しい技術を用いた先進的な図書館像</p> <p>（4）「絵本のまち板橋」の視点を踏まえた読書推進</p> <p>（5）その他</p> <p>3 事務局からの連絡</p> <p>4 閉会</p>

配 布 資 料	<p>資料1 第2回検討委員会 資料</p> <p>資料2 第2回検討委員会 参考資料</p> <p>資料3 第四期板橋区子ども読書活動推進計画検討委員会 構成員名簿</p> <p>資料4 第1回検討委員会 議事録</p>
所 管 課	教育委員会事務局 中央図書館（電話 6281-0291）
会 議 状 況 (会議概要)	<p>1 開会 中央図書館長より第2回から参加の委員・事務局員・識見者の紹介をし、それぞれ自己紹介を行った。</p> <p>2 議事 中央図書館長より、以下の(1)～(5)について、資料・スライドを用いて説明を行い、(3)～(5)について、委員による意見交換を行った。</p> <p>(1) 前回会議の振り返り</p> <p>(2) 現状までの意見まとめ</p> <p>(3) 各基本方針に関する施策の検討</p> <p>①子どもと本の出会い・自主性の育成をサポートする手法と人材活用</p> <p>②ティーンズ世代に有効な取組</p> <p>③読書バリアフリー法を踏まえた利用しやすい図書館環境／新しい技術を用いた先進的な図書館像</p> <p>(4) 「絵本のまち板橋」の視点を踏まえた読書推進</p> <p>(5) その他</p> <p>(3) 「各基本方針に関する施策の検討」について</p> <p>①子どもと本の出会い・自主性の育成をサポートする手法と人材活用</p> <p>[主な意見]</p> <p>・図書館サポーターの個人登録は260名、団体数は6団体。図書館でのおはなし会、ストーリーテリングを行っているが内容を充実したい。横の繋がりが無いので、他のサポーターとの繋がりを持ち、事前にプログラムを一緒に考えたい。</p> <p>・ブックリストに相当するような、ボランティアの百選や、今日読んだ本のリスト、おはなし会用のブックラックに子ども達が即時本を見られるように用意する。子どもはイベントの直後から次につなげていかないと熱が冷めてしまう。本と子どもをつなぐ機能が必要である。</p> <p>・子ども達は自分の友達が紹介している本だと気になって読みたくなる。中学校の文芸部の委員が一人一冊本を紹介する、先生が紹介する等の取組が成功したら、全中学校に文芸部を設置してもらい、月1回ブックトークを行う等、子ども達自身に興味を持ってもらう。学校での取組ではビブリオバトルも考えられるが、こちらは緊張感を伴うものであり、心理的なハードルという意味ではブックトークの方が取り組みやすいと考える。</p>

・自分のおすすめの絵本を手紙にして紹介する絵本郵便という取組は、他校との交流が生まれる。図書館オリエンテーションを毎年続けることが重要であり、そこで電子書籍の使い方を教えれば自分の家でも本を読むことができる。学年の発達段階に合わせられるので、本に触れる機会や本を読む機会を増やすことができる。

・読書への動機付けを高める取組は多種類あり、年齢によって向いているもの、向いていないものがある。学校では複数教科の連携があるので、他の教科の先生が関われる仕組みを作ることが大事である。小さな取組から規模を大きくして展開していけるとよい。継続できそうなものを学校単位で発展し、情報共有になればもっと広がる。

・子どもの読書は心の営みに関わることであり、個人的なものだということを考える必要がある。必ずしも読んだ本を周囲に発信したい子ばかりではない。オンラインや匿名性での意見共有があるとよい。

・ビブリオバトルを実施する場合には、トークの上手さの評価が高くなってしまい、本来のビブリオバトルのコミュニケーションが疎かになってしまいがちである。子ども任せにしない、子どもが手に取らないけど良質な本に出合わせる大人の介入が必要である。

・学校での電子書籍は義務教育の間に子どもに伝えてほしいことのひとつである。

・小学校、中学校では、読書感想文コンクールの応募総数が減少している。東板橋図書館に協力していただき、図書室開放やビブリオバトルの実演等を行い地域での横の繋がりを広げる取組を実施しているが、司書教諭が少なく、司書も週1回しか学校に来ない現状から、期待されるようなところまで出来るか難しい。部活動も地域移行を目指しているため、文芸部の設置は難しい。読書活動推進計画を考える上で、学校内よりは地域で取組むことを中心に考えた方がよいのではないかと考えている。地域活動の一貫として学校を組み込むことは問題ないが、まずは教育の中でという視点を広げ、地域図書館が起点となるような取組に移行した方がよいと考えている。

・図書ボランティアが保育園や小学校に出向いて少人数単位で読み聞かせをしてもらえると良い。コーディネートをする時間も気持ちの余裕も無いので、そこを図書館が担ってくれると学校としても負担が少なくなる。

・高島幼稚園では「よんでよんでの日」という保護者がお子さんに絵本を読む機会を設けているが、家庭によって興味の有無が二極化している。興味が多様化しているので、機会を作ることは大事であり、読み聞かせが上手な方に来ていただけたら嬉しいと思う。

② ティーンズ世代に有効な取組

[主な意見]

・小学4年生の子どもが保育園に行き読み聞かせをやっているが、園児が楽しむだけでなく、生徒も発信者になることができ、読書が身近になる大きなチャンスである。子ども達同士の横のコミュニケーション、異年齢のコミュニケーションにもなる。

	<p>・教室の後ろに学級文庫として置いている本を読んでいる子どもを含めると学校図書館の利用数はもう少し増えると思う。学校内での図書室の場所、環境から見直す必要がある。</p> <p>・中学校では書評座談会を開催し、作家の方を招いて課題図書を選定し、本を読んで語り合うという取組を実施している。本が嫌いなのではなく、本を読む時間が無い、街中に本屋が無いなど本を手にする機会も減っている問題も考える必要がある。</p> <p>・学校の先生方が忙しく、学校図書館まで手が回らないこともあると思うので、部活ではなく、図書委員会を活性化させることが一つの手段である。子ども主体で学校図書館を運営することで、他の子どもにも関心を持ってもらう。</p> <p>・絵本の翻訳コンクールは、その本の意味を読解し、相手の立場になって伝達方法を考えなければならない。読書の面白さはSNSに比べると不利だが、学ばないと面白さが理解できないので、ハードルは高いがそれが翻訳コンクールの一番大きな役割だと思う。これを機に海外文学がたくさんあることを知ってもらいたい。</p> <p>・オープンな学校図書館は期待できる。なるべく子どもがいる時間に学校図書館に人がいれば子どもも足を運ぶと思う。</p> <p>・学校図書館の司書配置は、業務委託により各学校1名を配置し、週1日6時間が現状である。配置日数を増やす検証をしており、司書を週2日にしたこと貸出冊数が増えた学校や、低学年中心から他学年のお子さんにも利用できるようになったという効果もある。各学校にどれだけ増やせるか総合的に考えながら検討している。</p> <p>③ 読書バリアフリー法を踏まえた利用しやすい図書館環境／新しい技術を用いた先進的な図書館像</p> <p>[主な意見]</p> <p>・いかに本を手に取りやすくなるか、子ども達を読みたい時に読める環境がないという問題も含めて、電子的な環境も活用しながら長期的に見ていく必要がある。</p> <p>(4) 『「絵本のまち板橋」の視点を踏まえた読書推進』について</p> <p>[主な意見]</p> <p>・いたばし国際絵本翻訳大賞は翻訳界限でも一番有名な賞で、大賞をとった人が実際に商業出版される賞は日本でここだけであり、翻訳家の登竜門となっている。一次審査員の人員を手厚くしていただきたい。</p> <p>・NPOと行政が連携して、アメリカのリーチアウトアンドリード（小児科医から家庭に本を配る取組。資金は寄付で賄う。）のような取組を板橋区でもはじめていただきたい。リトル・フリー・ライブラリー（有志が自宅の庭等に自由に借りられる本を用意する）のような取組を行うことで、本との出会いが増加し、絵本のまち板橋らしい結果が生まれるかもしれないので検討していただきたい。</p> <p>・練馬区では、保健師と図書館と住民ボランティアでブックスタート事</p>
--	---

業を行っているので、板橋区でも配付率を上げるために、保健師の協力を得てはどうか。

・板橋区でも10月に「小さな絵本館×こどもえほんだなプロジェクト」を新たに開始した。たくさんの絵本と絵本棚を設置したい板橋区内の子どもの居場所、それを支援してくださる企業団体、個人の方を募り、絵本棚と絵本の寄贈を実現するプロジェクトだが、参加をしてみたいと興味を持ってくださる事業者もいるので、このプロジェクトが大いに盛り上がるのではないかと考えている。

・絵本は、かわいいや癒やされるという部分だけでなく言葉と絵の総合芸術であること、文学は膨大な文字をもって表すことを絵本は一瞬にして伝えることができることの利点の理解など、本を手渡す大人達の育成も大事である。

(5) その他

[主な意見]

・障がいに関して、子どもから直接相談されたこととして、「体は大人になっているので読み物としてはティーンズのものを読みたいのに、手渡されるものはいつまで経っても絵本ばかり」という不満をぶつけられたことがある。内的な障がいの子供達に対する支援や心的な部分もフォローしていただきたい。また、日本語が不自由な外国籍の子供を巡っても同じようなことが起きているのでこちらも配慮が必要である。

・司書を二人に増やして検証する際に、何を検証するかを考えていただきたい。学校図書館と公共図書館の連携やメディアセンターに先生の職員室を置く、という発想も考えていただけると子供達とのコミュニケーションも増えると思う。

・児童館も絵本のまち板橋については取り組んでいる。何らかの形で今よりも保育士が連携できると、また一つ違った形の取組ができるのではと考えている。

・保育園の中で親子ふれあいブックコーナーという乳幼児向け絵本の貸出を、地域に向けた取組として実施しているが、保育園の利用家庭のみに貸出している現状である。近隣の、乳幼児を子育て中の方への利用促進につながるような発信方法も園で工夫していきたいと考えている。小学生の子どもが読み聞かせに来てくれたり、中学生が職場体験で毎年保育園に来てくれる。その小学生や中学生の成功体験から大人になって我が子ができた時に、その読み聞かせで自分の楽しい思い出に、保育園という場所があることが一番望ましいと感じた。

[副委員長によるまとめ]

単位を大きくすることで実現できるものとそうでないものを見極めなければならない。小さいところから始める地道な取組と、行政も関わって大きな単位で進めるところをまとめていただく時に整理が必要である。時間と人の確保、どのようなところと連携できるか、目標をどこに置くかを考える必要がある。人の確保について、つくば市の事例をあげると、人が足りず開くことができていなかった学校図書館に、大学生が協力することで毎日の開館を実現できたということがある。また時間の

	<p>確保の観点では、新たに読書時間をつくるのではなく、既存の調べ学習時間の一端で読書のきっかけづくりをするというような発想の工夫も重要である。実現可能を考慮し、一つでも多く実現できるように検討する。</p> <p>3 事務局庶務より今後の予定等事務連絡 次回会議は令和7年6月下旬頃 予定</p> <p>4 閉会</p>
	<p>会議の要点は、以上のとおりである。</p>